園のおたより

第　９　号

令和８年１月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

あきらめないで

園長　関　由起子

　あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。冬休みが明け、賑やかな声が園舎に戻ってきました。始業式で並ぶこどもたちの姿を見ると、冬休みの間に背が伸びただけでなく、どこか顔つきもシュッとして、精神的な頼もしさまで感じられます。
　さて、幼稚園では「お正月遊び」の真っ最中です。 かるたに凧揚げ、けん玉、羽根つき……。中でも、学年ごとに熱を帯びているのが「こま回し」です。３歳児さんは手のひらでひねるタイプ、４歳児さんは紐を引くだけのタイプと、発達に合わせてステップアップしていくのですが、最年長の５歳児さんが挑むのは、これぞ日本の伝統、紐をきっちり巻き付けて放り投げる「投げゴマ」です。
　実は私、この投げゴマに挑戦して今年で３年目になりますが、全く上達しておりません。５歳児の保育室へ修行に行くと、小さな師匠たちが寄ってきます。「園長先生、紐はこうやって巻くんだよ」「もっとシュッと投げて！」と、実に的確なアドバイスをくれます。しかし、私の放つこまは、無情にも床を虚しくゴロゴロと横向きに転がっていくばかり。「これは場所が狭いからだ」と環境のせいにしてみた私は、広い遊戯室へ移動し、独り自主トレに励みました。しかし、５回投げても、10 回投げても、こまは立ち上がってくれません。
　「ふぅ、今日はこれくらいにしておこう（というか、もう無理だ）」
心がポキッと折れる音がしたその時。転がっていったこまを拾おうと腰をかがめた私の背中に、一本の矢が突き刺さりました。
　「あきらめちゃだめだよ」
　振り返ると、そこには５歳児のＡさんが、じっと私の顔を見て立っていました。 ドキリとしました。見透かされていたのです。「あ、今この人あきらめようとしてるな」という私の心のささやきが。
　「……そうだよね、あきらめちゃだめだよね」
　思わず苦笑いしながら、私は再び紐を手に取りました。結局その日はお片付けの時間になりタイムアップとなりましたが、後日、Ａさんの励ましを胸に特訓を続けた結果……ついに！こまがシュンシュンと音を立てて回ったのです！その時の、こどもたちと上げた歓声といったらありません。あの言葉がなければ、私は今頃「こまは転がして遊ぶものだ」という新説を唱えて逃げていたかもしれません。
　今年の私の抱負は、Ａさんに授かった「あきらめない」に決まりました。保護者の皆様も、新年の抱負を立てられたでしょうか。「今年こそダイエットを……」「今年こそ早寝早起きを……」と決意しつつ、早くも挫折の兆しが見えている方がいらっしゃいましたら、ぜひ幼稚園へお越しください。５歳児の厳しい、いえ、温かい「あきらめちゃだめだよ」というエールが、皆様を待っているかもしれません。
　本年も、こどもたちと共にあきらめず、一歩ずつ成長していきたいと思います。

育ちのおとも

副園長　小谷　宜路

先日の公開保育研究会で助言をいただいた教育学部の二宮先生（算数・数学教育）から、「これから学校の『教科』の枠組みも変わっていくだろう」とのお話を伺いました。私自身がこれまで受けてきた教科や科目と比べただけでも、確かに、現在のものはいろいろと違いがあります。高等学校の国語には「言語文化」「古典探究」、社会科には「公共」などかあります。現国・古文・漢文・公民といった科目で学んできた身としては、現在の枠組みの内容を捉えるだけでも一苦労です。さらに「情報」といった全く新たな教科も位置付けられています。遡って私の中学校での授業を思い返せば、男子は「技術」、女子は「家庭」と別学による時間割でした。もちろん現在は共通して「技術・家庭」と共修の教科です。小学校まで遡ると、低学年の「生活」はありませんでした。保護者の方には、生活科を小学生時代に経験された方もおられるかと思います。

小学校低学年で生活科がスタートした背景の一つは、幼児教育から小学校教育への繋がりを、いかにこどもにとって安心・安定したものにするかといったことがありました。時間の流れ方、人の動きや関わり方、空間の広さや場所のつくりなど、幼児期の園生活と小学校の生活は、様々な違いがあります。昨今、幼児期と児童期のつながりの在り方については、『滑らかな接続』といった言葉で表現されることもあります。年長さんの３月と１年生の４月の間に、超えるのが無理な隔たり（壁？溝？段差？）が現れないように、学び方の一つの工夫として生活科が始まりました。さらに進んで現在の学習指導要領では、生活科だけでなく、全ての園生活と小学校生活を「接続」することが求められています。

本園では、附属小学校の生活科や１年生を担当する先生方と一緒に、『育ちのおとも』というリーフレットを昨年 12 月までに作成しました。「おとも」は、こどもたちの周囲にいる大人として、その育ちに寄り添っていく姿勢の大切さを込めて名付けたものです。また、リーフレットの副題は『幼児期～児童期の育ちを丁寧につなぐ手がかりに』としました。大人の側が考えた教育にこどもを当てはめるのではなく、幼児期～児童期にかけてのこどもたちに「おとも」するリーフレットと位置付けています。リーフレットを一つの手がかりにしながら、幼稚園生活も小学校生活も、こどもたちにとって心地のよい日々になるように努めていきたいと思います。

※リーフレットは、幼稚園 HP、こどもの育ち応援センターHP から見ることができます。

クラスだより

１くみ

「遊びから生まれること」

　ある日のこどもたちの会話です。「もんだいです。みどりの電車はなんでしょうか」「埼京線！」「ブー！千代田線でした」「じゃぁ、きみどりの電車はなんでしょうか」「…」同じテーブルの人は答えていませんでした。すると、「山手線！」どこからか聴こえてきました。「え？誰が言ったぁ？」と驚く電車ハカセ。隣の隣のテーブルに座っていた人が答えていました。ここにも電車ハカセがいたのです。あの時のキラキラと輝く眼差しは、目に焼き付いています。それから２人は電車を作って遊ぶようになりました。「ぼくは 500 タイプエヴァが好きなの」「13 号車を作ろうよ」「副都心線は何色でしょうか」わたしには初めて聴く名前ばかり。わたし首を傾げていると、一生懸命に教えてくれます。職員室に戻って今日教えてもらったことや、あの人が教えてくれた電車はどんなものなのかと話題にすると、教えてくれる人がいました。職員室にも電車ハカセがいるのです。

　またある日は、泣いている人を見ると、どうしたのかな？とじぃっと見つめている人がいました。「先生、〇〇ちゃんなんで泣いてるの？」とわたしのもとに。その人の心の内を見ているようでした。普段のあの人とは違う姿に心配をしているのだと思います。相手に言葉をかけることも大切ですが、心の内に問いかけていく姿が素敵だと思いました。それから、わたしは問いかけてみました。もしも泣いている時にあなたはどうしてほしいかと。すると、「頭をよしよしして、手をぎゅーっとして(繋いで)ほしい」と応えてくれました。この人が泣いた時にはきっとそうしようと思います。そして、しばらくすると、泣いている人に頭を撫でて、手を繋ぐ姿がありました。心を向けてくれる人がいることに嬉しくなりました。もちろん泣いている人も気がついたようです。

　これまで関わりの少なかった人の魅力に気づいて一緒に遊ぶようになってきました。それは、安心した生活の中で起きるいろいろなことが溶けあって、人と人の間にあたたかいものが生まれるからなのだと思います。

２くみ

「自然と体が動き出す」

１月になり、寒さが一段と厳しくなってきましたが、支度を終えると真っ先に赤白帽子をかぶり、園庭へと出かけていくこどもたちの姿があります。戸外では氷鬼などの鬼遊びが盛んです。以前は、大人が一緒に入り、ルールや遊び方を確かめながら進めることが多かったのですが、最近ではこどもたち同士で誘い合い、大人がいなくても遊びが続いていく様子も見られるようになりました。大勢で遊ぶ面白さを感じながら、ルールや進め方を共にして、遊びを進めています。

園庭での運動的な遊びだけでなく、こどもたちの体が思わず動き出す場面は他にもあります。例えば、音楽的な表現をする場面です。２組では１月、「北風小僧の寒太郎」「靴が鳴る」「朝はどこから」などの歌を歌ってきました。歌い始めると自然と手や足が動き出します。「北風小僧の寒太郎」では“ヒューン”という歌詞に合わせて風をイメージして手を回したり、「靴が鳴る」では隣の友達と手をつなぎたくなったりと、こどもたちの中から自然に生まれる動きが広がっています。決まった振りではなく、メロディーや伴奏、歌詞からイメージを膨らませた“ありのままの表現”を大切にしています。

また、音楽を取り入れながら「ありときりぎりす」のお話を表現する遊びも楽しんでいます。ありやきりぎりすだけでなく、夏を象徴する「ひかりのこ」や冬を象徴する「ゆきのこ」なども登場します。形のない“ひかり”や“ゆき”も、音楽があることでこどもたちそれぞれのイメージが動きとなって表れます。友達の表現を真似してみたり、顔を見合わせて嬉しそうに一緒に動いたりする姿も見られ、表現がさらに豊かになります。こどもたちがその時感じたことが直に表れたり、友達の姿を受けて変化していったりする表現を大切にしていきたいと思います。

３くみ

「和の文化に触れる」

３学期には、お正月遊びとしてコマやカルタ、けん玉、だるま落としなどを新しく紹介し伝統的な遊びにも触れる機会となるようにしています。２組の時よりも難しいコマ回しに苦戦しながらも、回せるようになった友達が紐の巻き方や投げ方のコツを教えてくれるようになり、少しずつ回せる人が増えています。いろいろな技に挑戦してみたり、どのくらい長く回せるかを競ってみたり、友達の姿に刺激を受けながら繰り返しやってみたり、試したりすることを楽しんでいます。

こども会の時には、伝統的な楽器として「琴」を紹介しました。会の中で琴に興味をもっている姿がたくさんあったので、後日、食休みの時間に触れることができるように遊戯室に準備しておきました。みんながお弁当を食べている時に琴を弾いてみると、「昔のお店屋さんみたいだね」「それ（琴の音）を聞くと昔の音がするもんね」と話している声が聞こえてきました。それまで会話を楽しんでいた周りの友達も２人のつぶやきを聞くと、どこか納得したような表情で琴の音に耳を傾けながら静かにお弁当を食べ始め、遊戯室の中はこどもたちがイメージする「昔のお店屋さん」の雰囲気になっていきました。こどもたちが使う「昔」という言葉の中にはいろいろな「時」が隠れています。自分が今よりも小さかった時のことを指していたり、自分が生まれるよりもずっと前のことを言っていたりするのかもしれません。今回、琴の音色を聞いた時のこどもたちの中にある「昔」の景色はどのようなものが広がっていたのでしょうか。これまでのそれぞれの生活の中で「琴の音＝昔の音」という印象をもつきっかけになった出来事があり、こどもたちの間では多くの言葉で語らなくても、琴の音色から感じる同じような「昔」のイメージが生まれていたのではないかと思います。季節の行事や伝統的なものなどに触れる中で、一人一人が感じたことを大切にしながら、こどもたちの頭の中に広がる豊かな世界を一緒に楽しんでいきたいと思います。